

■研究プロジェクトの目的

死生観は、人々がそれぞれの死を見つめ、限りある人生の意味や人間を見直し、互いに愛情をもって接するということにある。仏教の「生死」の意義は、「死生」と同様に、あらゆるものが無常にして稀有であることを自覚させるとともに、曠劫より久しく流転輪廻し、迷い・苦・罪を繰り返しているという反省を促し、時空を超えてあらゆるいのちが相互に関係しあっている一体感も育む。不老不死を求める医療において、生老病死の四苦を超える仏教死生観とビハラの意義を再評価し、生きることの意味、死から生まれる志願、慈愛、感謝を育む教育を世界に発信するところに、研究の目的・意義があるといえるだろう。

研究目的は、2010年度からの3年間、「死生観と超越」の研究に取り組む中から生まれてきた。その新たな目的は「仏教・浄土教を機軸としたグリーフサポートと救済観の総合研究」であり、愛する人との別れや自己喪失に伴うさまざまな悲嘆（Greif）を理解し、生死を超えた依りどころ、救済観を解明していくところにある。

死生観・救済観研究は、二つの角度からのアプローチが必要とされる。一つめは、何よりも現場を踏まえ、さまざまな死別悲嘆をどのように理解し支援するかというグリーフサポートの実際的・臨床的研究である。東日本大震災における遺族の悲嘆、自死遺族の悲嘆などを理解しつつ、日本にふさわしいグリーフサポートのモデルを構築する。二つめは、歴史を超えて受け継がれてきた仏教の伝統文化を踏まえ、仏教・浄土教を基軸として、悲嘆をどのように受けとめ、葬送や救済観を明らかにしてきたかという仏教教学的・教理史的研究である。その仏教・浄土教の特色を意義づけるために、宗教多元社会におけるグリーフサポートと救済観を理解することと、東アジアから日本に流れてきた儒教・道教にみられる弔い・葬送観と救済観に学び、学際的な研究交流を進める。

はるか昔、旧石器の時代の人々はすでに墓を作り、花を手向けて、亡き人への慈しみを表した。人類は、世界のさまざまな地域・宗教において、病人や老人を温かく看取り、看取りと葬送を縁として、相手から受けた愛情や自己の人生の意味を見つめ直し、皆ともに助け合って、死を超えた心の救いを希求している。そこで、人が生老病死に関わるさまざまな孤立と苦しみの中で、安らぎ・人生の意味と方向性を見出し、確かな心の絆と慈しみを育ていけるように、その生死の危機を超える道筋を指し示すのが、この研究プロジェクトの目的・意義である。

■年次計画

平成25年度 各班ワークショップ、学術講演、国際会議、被災地ならびにビハラ関連施設フィールドスタディ・年次報告書

平成26年度 各班ワークショップ、国際会議、学術講演、学会発表、被災地ならびにビハラ関連施設フィールドスタディ・年次報告書

平成27年度 各班ワークショップ、総括シンポジウム、学術講演、学会発表、被災地ならびにビ
ハラー関連施設フィールドスタディ・年次報告書

■研究体制

センター長：鍋島直樹

副センター長：黒川雅代子

宗教多元的研究推進：高田信良

国際学術交流支援：那須英勝

医療と仏教の連携支援：田畑正久

リサーチ・ユニット1

ユニットリーダー：玉木興慈 副リーダー：鍋島直樹・黒川雅代子・田畑正久

「日本におけるグリーフサポートの実践モデルの開発的研究」

- (1) 東日本大震災により、死別を経験した遺族（行方不明者家族も含む）支援
- (2) 自死遺族の支援
- (3) さまざまな遺族支援の試み
- (4) 仏教と医療の連携によるビハラー活動とグリーフサポートの研究

リサーチ・ユニット2

ユニットリーダー：井上善幸 副リーダー：高田信良

「仏教・浄土教を基軸としたグリーフサポートと救済観の研究」

- (1) 仏教・浄土教・儒教・道教におけるグリーフサポートと救済観の研究
- (2) 宗教多元世界におけるグリーフサポートと救済観の対話的研究